

「今日もリザーバーが空になる夢を見た —— 「精神力」のその先へ」

はじめまして。U-40 部会員を拝命しております、札幌ハートセンター 札幌心臓血管クリニック 臨床工学科の吉田晃大と申します。今回、弘前大学医学部附属病院の堀さんよりバトンを受け取り、僭越ながら執筆させていただきます。私は体外循環業務に携わり 13 年が経ちますが、常に 100%の力で仕事に向き合ってきました。度々、家族との時間を忘れ仕事に没頭してしまうので、家族には申し訳なく思うと同時に、とても感謝しています。前執筆者の方々も書かれていましたが、視野の広さや知識・技術・五感、そして熱意は体外循環業務を担ううえで必要不可欠です。しかし私は、それらを支えるものとして「精神力」が最も重要だと感じています。手術室には常に様々なプレッシャーがあります。命を預かる重さ、緊急時の張りつめた空気感、長時間手術に耐える体力、医師からの無言の圧力。折れない心がなければ、人工心肺の前に座り続けることはできません。新人の頃、朝から翌朝まで 3 件の人工心肺を 1 人で回完遂した先輩の姿を見て「すごい！」と感じたことを今も忘れません。あの背中が、まさに「精神力の象徴」でした。この仕事は少なからず自己犠牲を伴います。私自身、一年の半分近くを待機で過ごしており、電話が鳴ればすぐに駆けつけなければならない緊張感の中にいます。常に「呼ばれるかもしれない」という状態は、私生活を削り、精神をすり減らす働き方でもあります。体外循環に携わる皆さんも一度は見たことがあるのではないのでしょうか。「何をしてもリザーバーが空になってしまう」あの悪夢を。目が覚めてもドキドキが止まらないほどリアルで、それだけこの仕事が精神を削ることを物語っています。それでも私が続けてこられたのは、自分の子どもに「パパ、カッコいい」と言われたい、その想いが支えになってきたからです。どんなにきつくても、その一言でモチベーションを取り戻すことができました。尊敬するある外科医が私にこう言いました。「人生、仕事 3 割。私事 7 割がベストだよ」。正直、その意味はまだ理解できません。今はとにかくがむしゃらに働く時期だと思っているからです。もちろん自分の働き方が正しいとは思いません。でも、やらなければならないという使命感があります。そしてその使命感を支えるのは、やはり精神力です。そしてもう一つ。言葉は悪いですが、このプレッシャーを「楽しむくらいアホになる」ことも大事だと思います。張りつめた空気に押し潰されるのではなく、その場を楽しみむくらいの強さと余裕がなければ、長くは続けられません。ただ同時に、こうも感じています。「精神力が必要だ」という考え方自体、もう古いのかもしれない。本来は、過剰な精神力や自己犠牲に頼らずとも働ける環境をつくるべきなのだと。人工心肺に本当に必要なのは、技術でも知識でもなく、最後は「人の精神力」。そう信じて走り続けてきましたが、その解釈も時代とともに変わっていくのかもしれない。「精神力の象徴」として背中を見せる時代から、誰もが健やかにプロフェッショナルを全うできる時代へ。

皆さんはどう思われますか。